

## 小児ワクチン

## 「混合化」で接種回数4割減

## もっと便利になる小児ワクチン

接種回数がやたらと多い小児の予防ワクチンは小さい子どもを持つ親の悩みの種だ。痛い注射に我慢を強いられる子どもももつらい。そんな親子にとっては「混合ワクチン」が救世主となる。

どのワクチンをどのタイミングで接種させたらよいか。接種に連れていく時間を捻出できるか。子どもが生まれてから1歳まで繰り返し接種を強いられる小児予防接種には、多くの親が悩まされる。

公費負担で無料化されている定期接種はジフテリア、百日咳、破傷風、麻疹、風疹、結核、ポリオ、日本脳炎の8種類。しかし、これで十分というわけではない。定期接種の中には希望者が自己負担で接種する任意接種のワクチンが複数ある。

接種の数をもっと減らしたいと考えるのは、無理からぬことだ。**実**は、海外ではすでに生ワクチンである麻疹、おたふくかぜ、風疹、水痘の4種を混合したワクチンがある。

また、ウイルスの殻などを用いる不活化ワクチンでは、ジフテリア

ア、百日咳、破傷風、ポリオ、ヒブ、B型肝炎の6種を混合したワクチンが存在する。

これらの混合ワクチンを日本で導入すれば、接種回数は劇的に減らせる(図2-4参照)。

## 新ワクチン続々発売でギヤップは解消傾向

日本は長らく「ワクチン後進国」と揶揄され、海外では当たり前前のワクチンが国内で使えないという「ワクチンギヤップ」の問題を抱えてきた。

30〜40年前にワクチンの副作用と、それに対する訴訟が頻発したことがその背景にあった。ワクチン不要論が横行し、行政やメーカーはすっかり及び腰になってしまったのだ。

ようやく、と言うべきだろう。2007年に厚生労働省がワクチン産業ビジョンの下、ワクチン強

母親の誰もが健康で元気な赤ちゃんの出生を願うもの。近年、胎児を専門に診療する「胎児科」を受診する人が急増している。

胎児科とは、子宮内にいる胎児を超音波診断装置などで診断し、異常があれば、胎児のうちから可能な限りの治療を施す診療科。出産後は小児科とも連携を取って、治療が継続される。

小児科や産婦人科の医師が担当することが多く、欧米では、20年以上の実績がある。日本では医師不足のために、あまり普及してはいないのが実情だ。

現在、胎児科があるのは、国立成育医療研究センター

(胎児診療科、東京都)、東京女子医科大学八千代医療センター(母性胎児科、千葉県)、湘南藤沢徳洲会病院(胎児科、神奈川県)などだ。

胎児科を掲げる病院が少ないため、どこも非常に混み合い、予約が困難な状態が続いている。

湘南藤沢徳洲会病院の胎児科部長である中村靖医師は「口コミで広がっており、

## おなかの子を治療する「胎児科」がママに大人気



©iconics/amanaimages

東北など遠方からの患者さんも多い」と言う。

胎児の完全な治療は、実際のところかなり難しい。

それでも、双子間の胎内での血流バランスが崩れる双胎間輸血症候群のように、胎児のうち治療すれば救命率が著しく向上し、健康状態を改善できる病気もある。

中には、出産前に胎児を診断することについて、「安易な中絶を促すものだ」とネガティブなイメージを抱く人も少なくない。

中村医師は「むしろ、きちんと診断して治療の方向性を示すことが、知識不足による不必要な中絶の抑制につながる」と胎児科の意義を訴えている。